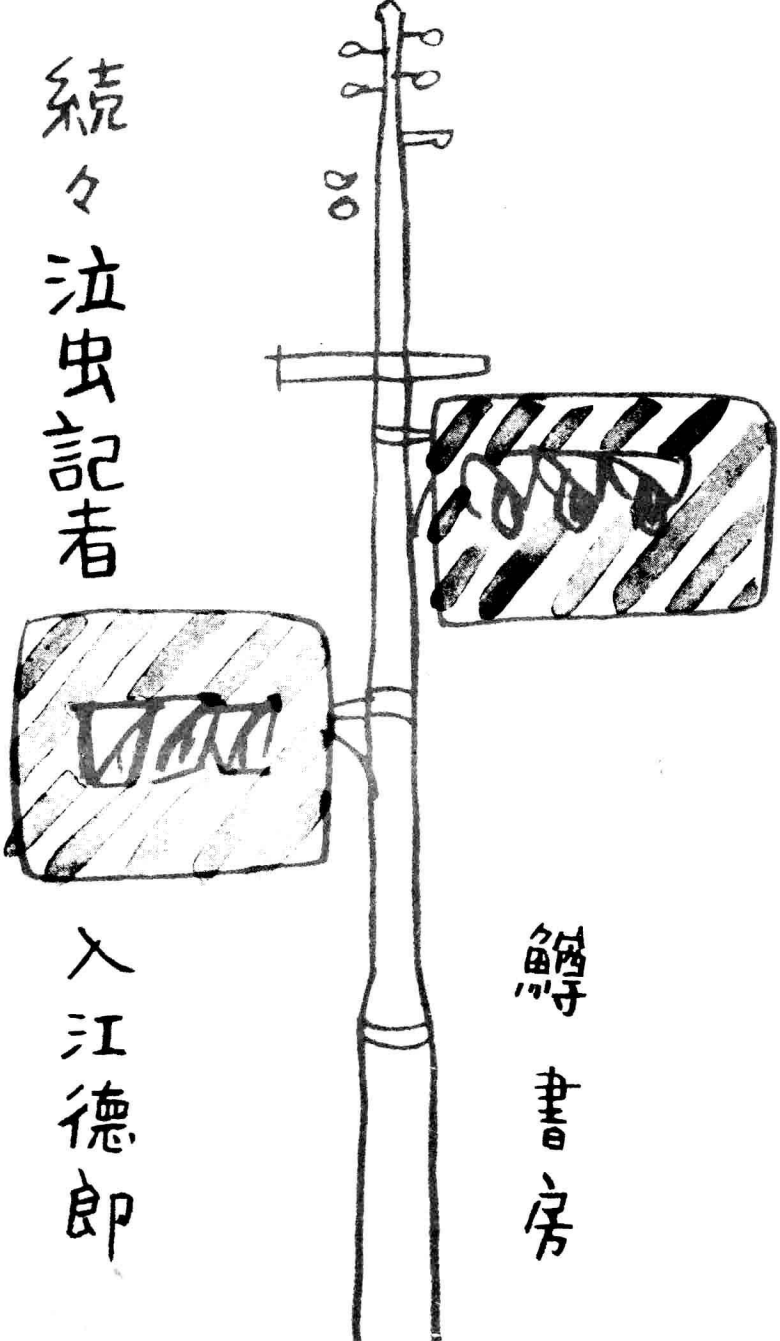
続々泣虫記者

入江徳郎著

続々 泣虫記者



入江德郎

鱒書房

著者略歴

大正二年福岡縣に生る。昭和十一年東大文學部社會學科卒。同年朝日新聞社に入り、長野支局、東京本社社會部、同整理部、西部本社福岡總局勤務。その後、大阪本社社會部次長、東京本社出版局週刊朝日副編集長を經て、現在東京本社社會部。

著書：―「書かれざる特ダネ」「ストライキ記者」「泣虫記者」「續・泣虫記者」

続々・泣虫記者　〒180

昭和二十八年六月十五日　印刷
昭和二十八年六月二十日　発行
昭和二十八年七月十五日　三版発行

著者　入江徳郎
発行者　増永善吉
印刷所　中央製本印刷株式会社

発行所　株式会社　鱒書房
東京都千代田区内幸町二ノ三（幸ビル）
振替口座　東京一〇七三五四番
電話銀座三三〇一・四七八二番

続々・泣虫記者

目次

入社試験異聞……五
美しき女賊……三
月給日奇談……二九
三平のメモより……三三
第一話　パチンコ罪あり……三五
第二話　深夜の疾走……六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ベレさんの特ダネ……七一
戦火を越えて……八九
恋愛落第記……一〇七
ウウさんのロマンス……一三九
恐妻先生……一五一
ミスター・心臓……一七一
刺青のある記者……一八七

裝幀・挿画　三芳悌吉

入社試験異聞

一

「先生、……お願いなんです。どうか、助けると思つて、僕を推薦して下さい」

一生懸命に頼みこんでいるのは、波野風太郎だ。さつきから、米つきバッタのように、なんともギコチないお辞儀をして、ここを先途と拝み倒しの一手だが、むかいあつて、ソファにかけている石山教授は、眉毛ひとつ動かさない。

「いくら頼んでも、それはダメだ。大学としては、求人側、採用申込者の意見を尊重するほかはない」

「——しかし、先生、いくら『成績優秀なる学生を求む』とあつたつて、それは求人側のキマリ文句だと思うんです。……僕の場合でも、大学としては、黙つて、『成績優秀』ということにして、推薦して下さればいいんじゃないか、と思うんですが……」

「なん度もいうように、それはできない。成績優秀ならざるものを、成績優秀として、推薦することは、求人側にたいして、虚偽の推薦をすることになる」

「しかし先生、だからといつて、成績二分の一以上の者しか推薦しないというのは、杓子定規じゃないですか。これでは、僕は、どこにも就職できません……」

「依頼してきたほうが、『成績優秀』の条件を付してきたから、判定する方法として、二分の一以上という制限を付したまでだ。就職できないという点は、個人的には気の毒だが、やむをえない」

「……しかし先生、よその大学では、こんな場合、就職志望者には、成績がよかろうと、悪かろうと、全部推薦して、入社試験を受けさせているじゃありませんか……」

「ほかの大学のことはしらない。本学は、本学のやり方でゆく」

「……しかし、先生……」

草疲れた制服の風太郎は一生懸命である。

顔を真赤にして、ソファの腰をなん度も浮かしては、哀願、嘆願、陳情、これつとめるが、稀代の頑固と偏屈で通つた石山老教授は、更に心を動かすふうもなかつた。

「……先生、僕は思うんです。大学の成績は必ずしも社会人としての成績ではないと考えるんです。ことに相手は新聞社ですから、入社試験をうける学生に、成績二分の一以上なんて、バカな制限をつけることは絶対に喜ばないと思うんです。機会均等に、入社試験だけは受けられるように、大学で推薦すべきだと思うんです……」

血を吐くほどの切々たる声だが、和服の教授のほうは、思いつめて悲壮な風太郎の表情には一顧も与えず、首をくくつたようにゆるんだ彼の金ボタンを冷たく見て、

「なん度もいうように、『成績優秀』という条件を、求人側のA新聞社が付している以上は、優秀ならざる学生は、推薦できない」

「……」

風太郎は切ないタメ息をついた。

融通の利かぬコチコチ頭の教授の多いT大学でも、その固さたるや、無双と評判の石山教授だから、この陳情は骨が折れるとは予測したものの、これでは取りつく島もない。六法全書に頭を下げて、モノを頼んでいるような空漠たる冷たさである。

「……先生、おねがいです。一生のおねがいです。どうか、A新聞の入社試験を受けられるように、僕を推薦して下さい。目をつぶつて、成績優秀ということにして下さい、お願いです……」

石山教授は雨降りの墓石の如く、無表情に答える。

「なん度もいう通り、君の成績は、文学部社会学科二十人の卒業予定者中、十八番目だ。成績優秀の部に入れることはできない」

「……そこを、先生……」

答えない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二

「なん度もいうように――」石山教授はこの言葉を無感動な機械のように、返事の前にくつつけるのだが、それには、ここ数日のいきさつがあつた。

風太郎はT大学社会学科の三年、明春は卒業予定である。ウカウカしてはいられない。ジャーナリストたらんとして新聞社、放送局、雑誌社をねらつた。時事単語の解説書やら、論説の熟読やら、なんとかして就職戦線突破を――と戦斗態勢に入つた矢先、秋風といつしよに、早いとこ例年の求人のトップ、A新聞社から、新入社員の募集が学内の就職相談部をつうじて、掲示板にはり出された。

風太郎は勇躍した。その足で下宿に帰ると、硯を持出して一心不乱、なん度も履歴書を書きなおして、早速就職相談部の窓口にもちこんだ。

これでよし、二週間のちに受験番号をもらつて、一ヵ月たつたらいよいよ入社試験だ……と心も逸つた彼に、翌日、速達が届けられた。「貴殿の就職に関し面談致度き点あり、早速出頭を乞う。T大学文学部就職相談部長、石山哲造」

受験の注意だろうと呑気に出かけた風太郎は、愕然とした。いつも苦虫をかみつぶしたような

石山教授兼就職相談部長は、一束にした履歴書の中から風太郎の分をぬきだし、
「残念ながら、君は成績がよろしくない。A新聞社からは、成績優秀者を推薦してもらいたいと条件をつけているので、これはお返しする」
思いがけない事態となつた。
風太郎は驚き、怒つた。石山教授に食つてかかつた。彼と同族系統の、ビリから数えたほうが早い成績の学生も二分の一はいるわけで、論争中にも、風太郎と同様に、履歴書を突つ返されるために呼び出された学生が二人きた。
三人して、石山教授に抗議し、哀願し、二時間近くも頑張つたが、ガンモドキを化石にしたような教授は、若い学生に釣られて怒つたりホロリとなつたりはしない。徹頭徹尾、
「成績不良のものは、推薦できない」
一点張りだつた。
風太郎たちは呆れた。変人で通つている石山教授が今年就職相談部長になつた時「妙な先生がなつたね」三年組は少からず危惧の念を抱いたものだが、果然、成績中以下組に、戦慄すべき事態が起つたわけだ。
「先生！　それじやあ、就職相談部の看板をはずして下さい。まるで就職妨害部だ」
「石山先生、あなたは小学校から大学卒業まで、首席で通した秀才だそうですが、僕等は点取虫

は軽蔑します！」

腹立ちまぎれに啖呵を切つて、履歴書をビリビリ破り、三人とも憤然と出てきたが、諦めかねた風太郎は、家にいつて、もう一度よく頼もうと、わかりにくい道を聞き、石神井の教授の宅をたずねた。

名にし負う偏屈学者だけあつて、家もポツンと離れた小高い雑木の丘の上にあつた。本は堆高く積み重なつているが、暗い応接間で、哀願、嘆願の限りをつくした風太郎は、又しても教授に相手にされなかつたのである。

「失礼しました。僕は——帰ります」

ベルを押しただけで教授は玄関へも送つてこない。研究の時間が惜しいのだろう。汚れた靴をつつかける風太郎の頭のところに、バタバタと音がして、紅い色のセーターが現れた。

二三度、お茶を運んでくれた教授の令嬢だつた。

憤然と顔をあげた風太郎は令嬢を見つめた。父親に似ず美しいのが余計に癪にさわつた。

「失礼します！」

余憤をたたきつけるようにガラス格子をしめると、外に飛びだす。月がかくれて真暗な夜だ。足もとが危い。なにもかも癪だ。畜生！

四五間もゆかぬうちに、あッと叫んだ。丘の一方が崩れて、三間ばかりの急な谷になつていた

のである。どーッと落ちた。そのまま切株にぶつつかりながら、下まで落ちた。

叫び声に驚いて、教授の家の玄関から、円い光が蝶のように飛んできた。懐中電燈だつた。腰をうつて、哀れな恰好ではいつくばつている風太郎を照らし、

「まア！　大変！」

一気に崖を降りてきた。令嬢だつた。気絶したと思つたらしい、彼の肩に手をかけて起そうとした。風太郎は邪慳に振りもいだ。令嬢は雨上りの百合のような匂いがした。

「ごめんなさいね。暗いから、お送りしようと思つてるうちに、こんなことになつてしまつて……」

風太郎は答えない。黙つて腰をねじ曲げ、地べたに座つたままだ。

「——履歴書のことでおいでになつたんでしよ？

何人もいらつしやるんですもの……」

風太郎の傍にしやがみこんだ。

「ご免なさいね、父はあの通り変人で……母が亡くなつてから、まるで意地が悪いの、——こん度だつて、まるで無茶だわ」

風太郎は答えない。石山教授の令嬢に鼻もひつかけてやるものかと、憤りに燃えている。

うるせえッ！　と貫一もどきに突き飛ばして、溜飲を下げたいくらいだ。残念なことに、したたか打つた腰がぬけて、きゆうには立てない。

空を見たら星があつた。冷えびえする風が雑木林に鳴つた。小学生のように風太郎は涙をこぼした。

サージの制服の袖で涙をふいている彼の側で、令嬢もつられてオルゴールのように泣いた。

三

——こんな悲喜劇があつたにもかかわらず、その年の暮に決定したA新聞社の採用試験に合格したのは、T大学文学部では、風太郎一人だつたから、世のなかは皮肉なものである。

あの夜、側で令嬢のもらい泣きの嗚咽をきくと、カッと怒つた風太郎は、忽ち立上つて跛を引

き引き、モノもいわず熊笹の藪をはいのぼつて、半泣きのまま下宿に帰つたが、捨てる神、拾う神の譬え、思いあまつてA新聞社をたずね、やつと五ど目に先輩の記者にあつて、逐一を訴え、身の上相談に及ぶと、

「なあンだ、ばかばかしい。石山哲造の面目躍如だね。はねられた履歴書はオレが頼んで直接に社の人事部にだしてやる。すぐ持つてこい」

一週間以上の煩悶はこの一言で吹飛んでしまつた。この時くらい、先輩が頼母しく思えたことはない……。

編集採用六人に千人を越す志願者だ。第一次は語学、作文、時事単語、これでフルイにかけ、一挙に五十人にしてしまうのだが、風太郎は幸運にもパスした。

「わが大学生活を顧みて」これが作文の題だ。石山教授への恨みもつもる彼は、散々に大学教育のあほらしさ加減を罵つた。実感が甚だこもつているので、試験委員のお眼にとまつたらしい。

第二次で十五人に、更にその中から面接でギュウギュウいわして十人に、それを新聞社の手で、家庭や思想や下宿の評判まで調べる。はらはらする綱渡りのまに、奇蹟の如く、風太郎合格、下宿の天井も抜けよ、と採用通知の速達をふり廻して、彼は躍りあがつた。

考えてみれば、おかしな話だ、石山教授御推薦の成績優秀組は、全員第一次試験で落ちてしまつた。第二次の時に顔をあわせたのは、「成績不良ニッキ」と履歴書を突つ返され、仕方なく先

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.